

工事の げんば 現場より

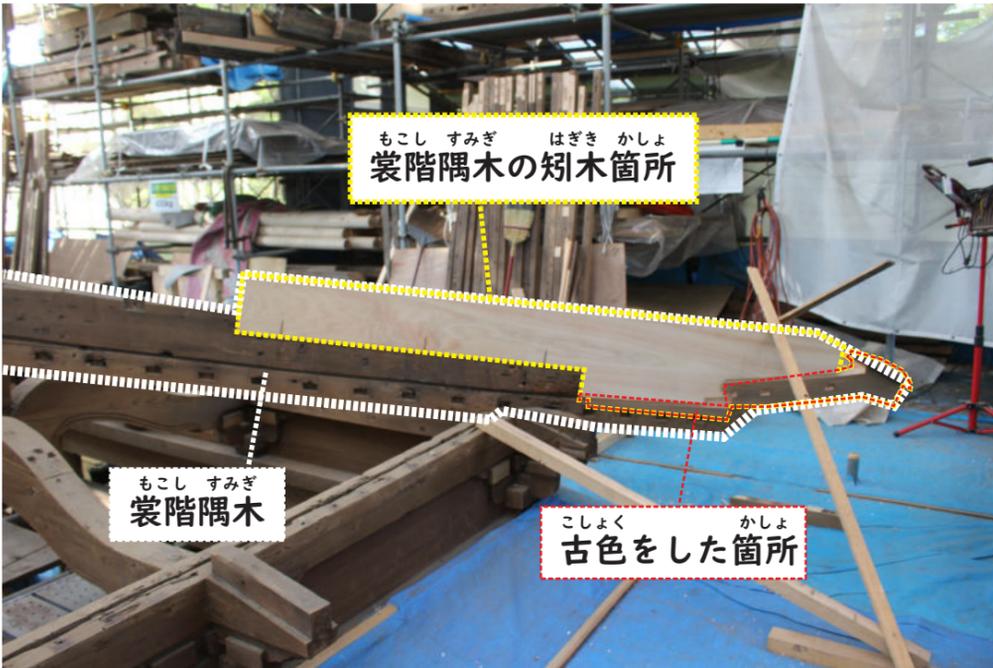


今はこんな様子だよ。



5月1週目

令和2年度より半解体修理を始めた旧東慶寺仏殿では、解体しながら傷み具合・劣化具合を調べ、それに基づいた補修・補強方針が検討されました。現在それに基づいた補修や補強が行われ、建物が元の形に戻るよう順次組立が行われています。傷みが著しく再利用が難しい部材については矧木や埋木という補修を行い、建物が健全に永らえることが出来るようにしています。



裳階隅木の矧木。傷みの著しい部分だけを新しい材料で作り直し、古い部材をなるべく残す手法。修理後に隠れる部分の色はそのままにし、見える部分には古い部材に馴染むよう「古色」をしている。

裳階垂木の矧木。傷んで取り替えたりなど、新しくした箇所には必ず修理年度を通常では見えないところに刻むルールがある。ここでは木材に「令和3年度補修」と焼き印を入れている。将来修理を行う時には、このような印が過去の修理記録の参考になる。

「古色」・・・新しい材料に色を塗ったり焼いたりして、古びた風合いに見せる手法。



▲全ての解体が完了した時点
(2021年3月)

少しずつ組み立てを実施
(2022年5月)

